

歌川廣重傳〔四〕

十日朝曇晴 二間に一間の鐘馗をかく、幕世話人衆奥にて酒もり、少々馳走になる、夕方龜雄大人同道一蓮寺かし座敷にて、酒もり、三桂法師同導、石橋庵にてさばぎ。

十一日曇 五尺屏風認め、鐘馗畫料金二百疋、鰻一重貰ふ、夜役者さの川市藏と酒もり。

十二日雨天 襖四枚認め、きうり一かご、なまり一本、辻仁より到來、夜そば馳走になる。

十三日晴天 柳町たびや槌の屋十文宅にて、狂歌のひらきあり、出席す。

十四日晴天 襖二枚認め、不快にて休む、幕手附金五兩請取、四兩一分二朱、江戸へおくる、

十五日晴天 御幸祭禮、見物に行く。

十六日晴天

十七日晴天 辻屋殿、襖出來、つかはす、茶菓子到來す、二間に一間の幟、孔明かきかゝる、

十八日晴天 孔明のぼり出來、晝後より幕かきかゝる、夜なべ。

十九日晴天

廿日曇天 まくすみかき出來、唐木綿鐘馗認め、肴町村幸へ行く、歸り芝居へ寄る、打出し後、三階にて、酒盛みそ漬、香の物、辻屋より貰ふ。

廿一日曇天

廿二日晴天 休

廿三日晴天 辻屋小鐘馗認め。

これより日記なし、されど甲府滞在中にて、御嶽、身延などへも、のぼりしと見えて、別冊に甲州御嶽外道の原、鞍掛岩象ヶ鼻、御嶽大門、鯨澤、不二川、洗濯岩、釜無川、早川等の圖あり、裏富士の圖をかきて、狂歌あり。

夢山はゆめばかりにてきゝしより、見て目のさむる甲斐のうらふじ、かくはかり甲斐あるふじをみな人の、うらといふこそうらみなりけり、又藤巻といふ所を畫きて、句あり夏旅や、夢はどこやら、朝峠、末に高尾本社、井に勝沼の柏尾山、大善寺、善光寺等の圖ありて、十一月十三日より、更に日記あり。

(上略)廿日曇雪降 朝六ツ半時頃、みどりまち、伊勢屋出立、松黒同導、甲府はづれにて、別れ一人道をいそぎて、六ツ時頃、上花咲問屋に泊る、此宿上々、信州の人相宿なり。

廿一日晴天 朝六ツ半頃出立、犬目しからき休み、酒汁□□まづし上野原大ちとや休み、晝食七ツ半頃、與瀬稻荷屋泊り、上辻屋兵助、役者川藏、相宿、上の原小澤源藏といふ郷士大家のはなしきく、

廿二日晴天 朝與瀬宿出立川藏同導、度々休み、酒呑む、いづれも悪酒なり、暮六ツ時分府中明神前、松本屋に泊る、酒甚だ悪し。

按ずるに、廿三日には、江戸に歸りたるものなるべし、此の日の記事なし、蓋し廣重が此の行は、専ら山水の奇勝を探るにある、芝居看板および幕、幟、襖、屏風など畫くは、本意にあらずれども、これまた生計の道、止むを得ざるに出づるものか、抑甲斐の國は、南は、駿河に界し、東は、武藏、相摸に隣り、西北は信濃に接し、山峰四方に連なり、郡郷其の間にあり、中に山水奇絶の所多し、廣重が爲めには、實に最良の臨本なるべし。

同十三年、六月、十一月兩度に出でたる錦畫改革の町觸には、廣重もまた大に困却せし由なるが、蓋し國貞、國芳のごとく、甚だしからざりしならん、如何となれば、廣重は、俳優の似顔をかゝず、且風俗美人畫は、其の所長にあらず、専ら山水をもて一家を起さんとするの志あればなり、されど當時國貞、國芳等と謀り、三八合筆にて、忠孝仇討圖會、小倉擬百人一首および東海道五十三對等を畫きたり。

同十五年三月廿三日、廣重上總に赴き、鹿野山に登り、四月朔日江戸に歸る。

按ずるに、廣重が此の行、何の爲めなるを知らず、唯鹿野山に登り、眺望して歸りたるのみなるがごとし、日記あり、標題に、日記、天保十五辰年彌生の末とありて、中に、

三月廿三日夜、四ツ時、江戸橋より船出、海上風なく、船ひまとり、廿四日晝頃、上總木更津着、廿六日、雨、廿七日、晴晝後曇、廿七日晴、四ツ時頃より、鹿野山參詣、庄兵衛殿、勇吉殿、

同導四人連、セツ過頃鹿野山に着、丸七泊り、旅人こみ合、夜具不足にて、二人もやいなり、同日箕尾天王の社へ參詣す、夜中相宿、同國富津の人、二人酒もり、大にさわぐ、廿八日、晴、廿九日、晴、四月朔日、晴、朝四ツ半頃、久須村出立、勇吉殿おくる、小泉にて仕度、九ツ頃木更津出舟、順風にて日暮頃、鐵砲洲湊町に着とあり。

按ずるに、鹿野山は、上總の南方に秀出し、山上の眺望絶佳なり、西北に武、相、豆、駿、甲、信等の十國を見る、十州一覽と稱す、春夏の候遊人多し。

弘化三年、廣重大鋸町より轉じて、常磐町に移住せり。

按ずるに、綾垣氏の小傳に、廣重翁は、久しく大鋸町に住せしが、後に常磐町に移るとあり、廣重が八代洲河岸火消屋敷を出で、大鋸町に住せし年月詳かならざれども、今久しくといへば、蓋し文化の末か、文政の初なるべし。

嘉永二年、夏の頃また常磐町より轉じて、中橋狩野新道に移る。同五年閏二月廿五日、廣重再び上總に赴き、又鹿野山に上り、安房に入り、小湊誕生寺および清澄寺に參詣し、東房州海岸の風景を眺め、更に西海岸に出て、那古、勝山、保田、鋸山の絶勝を探り、四月八日江戸に歸る。

按ずるに、廣重が此の行は、小湊誕生寺に參詣するを名として、専ら海岸風景の奇勝を探るにあるのみ、日記あり。

(上略)廿九日、小湊誕生寺參詣、日高宗兵衛、同導、行く道いづ方も絶景なり、新坂下り道に、朝日の御堂とて、日蓮上人

日りん來迎を拜し給ふ舊跡あり、海邊島山の眺望、絶景なり。風景は、奇々妙法の朝日堂、はるかに祖師の御寺輝く又誕生寺堂前の櫻の木ふり、梅によく似たるを見て、「梅の木に似たる櫻のかたへには、鶯に似し法華經のこゑ。

三月朔日 清澄寺參詣 おりのぼり案内、餘程の高山、風景よし、登り口、一の鳥居坂道、これより道法一里登る、清澄寺門前坂道、料理茶屋多くあり、いづれも田舎めかず、いきなり、境内櫻多く、花さがり、金比羅山眺望あり、此所にて、煙草を呑み、しばらく休み、升屋といへる茶屋にて仕度、此時向の茶屋にて、當地地頭の家來御奉行といふ人、名主二八其外けんもんの大勢、大しやれなり、

○本堂額面古代の畫、武者繪のがく二つ、其外天神記、車引の繪、おかしな風なり。

○此邊の町家建具屋多し、また在家の賤女、頭に物をいたきて、商ひに下る者、絶えず、老若まじり、風俗頗る風韻あり七ツ半頃濱萩にもどる、其の夜餅搗あり、草、粟、米なり、雛節句のまうけとて、此地の風なり。

同二日 朝、少々不快出立見合、逗留、唐紙三枚かく。

同三日雨 伯父といふ人より、酒一升貰ひ、酒宴、唐紙富士其外かきもの、夜床源來り、酒宴、

同四日 晝頃出立、馬にて行く、前原、磯村、浪太、天面、辨天島、しまの仁左衛門、庄太夫崎、江見、和田、此邊すべて磯邊浪打岩石多く、風景尤も絶妙にして、筆に盡し難し、和田にて

下馬、松田にて泊り、大夫崎といふ所に、名馬太夫黒の出でたりといふ洞穴あり、又蹄の跡つきたる石多くあり、ぬけ出たと穴のいはれに螺をふき、松田驛油屋泊、さんげく法師ほうきうり、相宿。

同五日 朝、畫少々認む、夫より馬にて那古まで行く、那古より下馬、觀世音參詣、山上風景よし、夫より道間ちがひにて、田舎道一里ほどそん、馬をやとひて行く、木の根坂峠の風景よし、一部の宿晝休、また馬にて行く、勝山風景よし保田羅漢寺參詣、金谷の宿、泊り、房州の人六人、相宿、夜ふと圖畫の事あり。

○大勢いろく雜談あり、其夜雨、朝まで降る、

同六日 雨具なく、其儘出立、天神山一切舟なし、大急ぎにて、木更津まで來る、一足ちがひにて、舟間にあはず、伊勢久にて、晝食、長須賀屋にて泊る。

同七日 天氣中位、畫少々認む、風あしくとて留められ、舟にのらず、四艘の舟、出帆を見て、大きにくやむ、藥師堂山の櫻を見に行きても、一向ふさぎ、無據こぢ付、葉櫻や木更津舟ともろともに、のりおくれてぞ眺めやりけり、菜の花やけふも上總のそこ一里とありて、八日の記事なし、八日は、出舟して恙なく、江戸に歸りしが、事忙はしくて、記事の暇なかりしものか、按ずるに、小湊は、安房國長狹郡にありて、東、海に面し、西、山を帶ぶ、僧日蓮の生れたる所なり、目蓮、父を貫名重忠といふ、左衛門と稱す、母は、清原氏、幼にして清

澄山の道善に師とし事へ、三十二歳にして、大道利生の志を發し、嘗て七字の題號を唱へ、始めて法華一派の宗門を立つ道善怒りてこれを逐ふ、遂に相模の松葉谷に到り安國論一卷を著はす、其の書極めて諸宗を誇れり最明寺時頼これを怒りて、伊豆の伊東に流す、其後益々諸宗を誹りて止まず、時頼大に怒りて、これを殺さんとす、時頼の子時宗憐みて其の死罪を宥め、佐渡に流す、文永十年赦に遇ひて甲斐に赴き、寺を身延山に建つ、即ち久遠寺にして、後に武藏に來り、池上の宗仲寺に寂す其の法華宗の開祖なるものをもて、此の地に誕生寺あり、信徒參詣多し。

安政五年九月六日、廣重、虎列羅病に罹りて没す、行年六十二、淺草新寺町の淨土宗東岳寺に葬る、法名顯功院德翁立齋居士、辭世、東路へ筆をのこして旅の空、にしのみくにの名ところを見ん。

按するに、此の辭世は、廣重が嘗て咏みおきしものか、或は他人の代りて咏みたるものか詳かならず、蓋し病に罹りて後に、咏みたるにあらざるべし、此の頃東岳寺に到り、廣重が墳墓を吊ひしが、其の墳墓は、高さ僅に二尺餘にしに、甚だ粗末なり、正面の右に、奥全院柏岩松榮信士、文化六巳年十二月廿七日とあり、これ廣重が父なるべし、又紅樹院孤月慈圓信女、文化六年二月十三日とあり、これ母なるべし、しかして左に顯功院德翁立齋信士、安政五年九月六日とありて、貞操院安室妙全信女、明治九子年十月二日とあり、これ廣重

が後妻なるべし、臺石に田中氏と刻してあり、廣重は安藤氏なるに、田中氏とあるは、甚だ疑ふべし、他日猶考ふべし。

廣重の没するや、門人等深くこれを痛み、其の肖像を畫きて發行し、追悼の意を表せり、畫中に、天明老人の小文あり、曰く、一立齋廣重子は、歌川の元祖、豊春の孫弟子にて、豊廣の高弟なりけり、今の世の豊國、國芳共に、浮世繪師にて、此三人に肩をならぶるものなし、常に山水けしきを好み、安政三辰のとしより、江戸百景をかき、目の前に、其の景色を見ることが、又狂歌江戸名所圖會の圖を畫き、月々に出版す、見る人感ぜざるはなし、然る所に、此菊月の六日、家のあとしき、おさまり方まで書き殘し、辭世を咏み、行年六十二を此世の別れとし、死出の山路へ旅立れ、鶴の林にこもられしこそ、なごりおしけれ、天明老人露けき袖をかゝけて、筆を採る。

按するに、天明老人は、本田氏、俗稱甚五郎、狂歌を善くし、狂名を盡語樓内匠といふ、廣重の友人なり。〔未完〕

日本水彩畫會新會友

埼玉縣北足立郡指扇村清河原

野原庄作

大阪市北區天滿橋筋一丁目中野吳服店方

吉田覺藏

春鳥會々友

大阪市東區博勞町二丁目百二番屋敷

青木忠次郎